

義肢装具体験イベント 開催報告書

vol.07
2020.12

第7回

『義肢装具体験イベント』

第7回となる「義肢装具体験イベント」を、2020年11月28日（土）に東京都西東京市立保谷中学校にて開催いたしました。

今回のイベントはコロナ禍での実施であることから、感染防止対策を十分に行うことを徹底しました。東京都教育委員会から教育機関に指導されている感染防止対策を遵守することはもちろんの事、JAPPOとしての感染防止対策は、イベント開始前にスタッフとユーザー全員の検温で体温を確認し、マスクとフェイスガードの着用を義務付けました。更に体験ブース毎にアルコール消毒液と除菌シートを複数個設置し、義肢装具の消毒とスタッフの手指消毒を細目に行い、生徒の肌に接触する際は、ゴム手袋を装着などの方法を講じてイベントに臨みました。

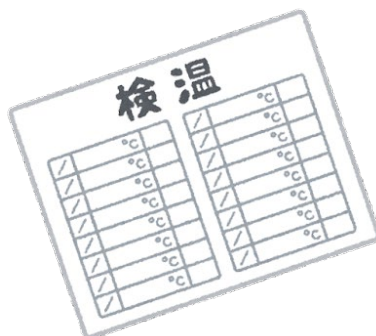
主なプログラム

新型コロナウイルスの影響はイベント内容にも多大な影響を与え、当初予定していたプログラム内容は中学校との協議で色々に変更して運営する事となりました。

当日は1限目で、「障がいのある方々と義肢装具士の関わり(講義)」と「採型デモ」に加えて、「大腿義足ユーザーによる日常動作パフォーマンス」を行い、2限目・3限目には「装具装着体験 & 高齢者疑似体験」、「筋電義手体験 & 骨格義足組み立て & 展示品閲覧」、「義足ユーザー交流」の3つのブースに分かれて体験を行いました。

中学校1年生とのびる組の総勢196名の生徒達を対象に、(公社)日本義肢装具士協会 障がい者/パラアスリート/PO啓もうWGと東日本支部から、23名がスタッフとして対応しました。

変更点も含めて、それぞれのプログラムについて解説いたします。



講義「義肢装具士と、その仕事とは」

「障がい者・パラアスリート」と、その方々を支援する義肢装具士の職業について、理解を深めてもらう事を目的に講義をしました。義肢装具士の仕事がオーダーメイドである事や、義肢装具以外の福祉機器も扱っている事などを知る機会を得られて良かったとの感想が出ていました。

また、講義に続いて代表の生徒1名をモデルに、短下肢装具の採型デモンストレーションを実施しました。昨年度は3種類の採型デモを同時に体育館の各所で行いましたが、生徒同士が密になる事を避けるために1種のみとし、生徒は移動せずに採型作業は壇上で実施してスクリーンに作業実演を映写し、少しでも見えづらさを解消する工夫を凝らしました。

更にこれまでは2・3限目内で行っていた「義足ユーザー交流」の時間を、密を回避するために短縮した事から、義足ユーザーによる日常動作パフォーマンスも壇上で行いました。



<講義の風景>



<生徒への採型デモンストレーション>



<義足ユーザー日常動作パフォーマンス①>



<義足ユーザー日常動作パフォーマンス②>

義足組立体験

組み上がっている義足を分解しもう一度組み立てる事で、義足の構造を理解してもらいました。

見るだけでなく、実際に工具を使用して義足を組み立てる事で、義足に対しての親近感も湧き、理解に繋がっていると感じました。

生徒達は説明する義肢装具士の話を真剣に聞いて作業を行っていました。



<骨格義足組立体験>

義足ユーザー交流

義足ユーザーのパフォーマンスや話しを直接見聞きし、義足ユーザーについて理解を深めることで身近に感じてもらい、ボランティアマインドを育成する事を目的に行いました。交流は義足ユーザー2名(下腿義足ユーザー1名、大腿義足ユーザー1名)の自己紹介から始まり、それぞれのユーザーが高活動なパフォーマンスで会場を沸かせていました。

下腿義足ユーザーは、義足の装着や歩行の動作から始まり、小走りなどのパフォーマンスを行いました。また、ライナーを用いた義足の懸垂状況を生徒に理解してもらうために、生徒に義足を引っぱってもらう体験をしてもらっていました。

大腿義足ユーザーは1限目に日常動作パフォーマンスを行っているため、こちらではより高活動な実演からスタートしました。例年と同様、生徒達からバドミントン経験者を募り一緒にラリーを行いました。

その後、生徒達から質問を受け付けましたが、義足の日常生活をしっかりと想像した上での発言が多く、1限目の講義が生徒達の知識の基礎となっていることがとても実感出来ました。

生徒達の感想からも、義足を使用して様々な動作が出来る事への驚きが見てとれました。加えて、ユーザーのポジティブな考え方を聞き、それらを励みに感じた生徒もおり、改めてユーザーとの交流の素晴らしさを感じました。



<下腿義足ユーザー交流>



<大腿義足ユーザー交流>

展示品閲覧

感染予防の対策で1限目の講義の際に実施していた義肢装具回覧を中止したため、生徒に義肢装具と触れ合う機会を設ける目的でブースを設置しました。

ここではスタッフが展示されている義肢装具の使用目的の説明や生徒からの質問に答え、実際に義肢装具に触れもらいました。このブースでの説明の前後で「装具装着体験」も行うため、より理解が深まっていると感じられました。ここでも、体験毎に小まめな消毒を行い、感染防止に努めました。



<展示品閲覧>

義肢・装具装着体験

今年では全ての体験ブースにおいて、感染防止対策から義肢装具の消毒作業や、スタッフの手指消毒も実施しました。昨年度と同様、体験用装具を装着することで「障がい者や高齢者の動作の不自由さ」を実際に体験してもらう事や、身体的負担を体感することでその理解とボランティアマインドの育成を目的としました。

下肢装具・膝装具を装着しての歩行や、体幹装具・頸椎装具を装着しての動作、高齢者の疑似体験用装具を装着して床から立ち上がり動作や歩行など様々な義肢装具の装着を体験してもらいました。

生徒達からも、体の不自由さを体験し障害者や高齢者へのいたわりの大切さに気付いた等の感想が見受けられ、身をもって体験する事の大切さを改めて感じました。



＜装具装着体験＞



＜高齢者疑似体験＞

筋電義手操作体験

訓練用の筋電義手を用いて実際に筋肉を収縮した時の手先具操作を体験してもらいました。また筋電義手のユーザーにも協力頂き、体験ブースに常駐してもらい、操作体験している生徒の傍らで実際の使用例のパフォーマンスをして頂きました。

生徒達は自分の筋肉から電気が流れている事にとっても興味を持ち、紙コップを潰さないように熱心に操作をしていました。



＜筋電義手の操作体験＞



＜筋電義手ユーザーとの交流＞

総括

イベント開催後に実施したアンケート結果では、全体の約95%が体験イベントへの参加に満足しているとの回答を得ました。

イベント内容では、筋電義手体験が最も関心を集めていました。筋電義手の構造を知り、実際に自分で操作する事で目の前のハンドが開閉し物を掴んでいる様子に、生徒達はとても興味を持っていました。操作に慣れず難しく感じている所に、筋電義手ユーザーがデモンストレーションをしてくれたため、より理解が深まり満足度が高かったと考えます。

また、障がいや義肢装具について、94～95%の生徒から理解したとの回答を得られました。1限目には講義以外にも義肢装具士業務の核となる採型を見る事が出来、2限目以降の体験でスタッフによる丁寧な説明が行われたために、それらが繋がって理解が高まったのではないかと考えます。

今回はコロナ禍のため、今までに全く経験のない事態での体験イベントの開催となりました。そのため、感染予防対策を徹底する事を根底に、全てのプログラムを再企画しました。時間や空間の制約が課せられた事で必ずしも十分な体制でイベントを実行出来た訳ではありませんでしたが、これにより今まで実施していなかった方法を試す機会を得られました。

今回の取り組みは、コロナ禍における体験イベントが開催される場合の、モデルケースになると考えます。

当WGはこの経験を更に次のイベントに役立て、若い世代に「障がい」「障がい者」、その方々を支援する「義肢装具士の職業」を理解してもらえよう、これからも積極的に公益目的活動に取り組んで参ります。

アンケート(生徒の記述感想)

- ・ 障害者の気持ちと大変さが分かり、体験やって良かったです。
- ・ 義足をしている人でも、普通の人と同じように歩けていて凄かった。
- ・ 今の自分、今の時間や祖父母に優しくすること、などを大切にしていこうと思いました。
- ・ 障がいについて理解が深まることが出来て良かったです。
- ・ 高齢者疑似体験で、高齢者がどうして腰が曲がるのかななどを身を持って知れて良かったです。
- ・ 普段あまり触れる機会がないので、とてもいい体験だった。こういう取り組みは、もっと行っていった方がいいと思う。
- ・ 義肢はすべて、オーダーメイドだということに驚いた。